第１９８回山形県社会教育委員の会議

グループ１

メンバー：古原委員、鈴木委員、髙橋委員

「青少年地域活動推進事業（仮）」について

鈴木委員

実際に高校生と中学生が連携して活動している成功例、顕著なものはないか。

事務局

中高生が対象の事業は今のところないが、中学生対象の事業で、アドバイザーという形で高校生が関わり、中学生のスキルアップにつなげる取組みは行っている。また、青年の家の「nico こえ」というボランティアサークルで、中高生が一緒に活動している例はある。

鈴木委員

中高一貫校での事例はないか。

事務局

まだ把握していない。

古原委員

高校生のボランティアサークル活動について、中学生に周知しているのか。

事務局

各教育事務所で開催している中学生対象のボランティア体験事業の中で、各市町村のボランティアサークルの案内をしている。また、青年の家でも、ＹＹボランティア（主に市町

村の中高生ボランティアサークル）の取組みとして各市町村のボランティアサークルの一覧を紹介している。

古原委員

山形市でも部活動が地域移行していくという変革期の中で、高学年の児童は、必ず部活動をしなくてはならないという意識ではなくなっている。だからこそ小学校でも、総合的な活動学習の時間で、地域に目を向けて活動することを大切にしている。中学生だけでなく、小学生にも中高生のボランティアサークルについて伝えることで、参画意欲が出てくると思う。学区、市町村の枠を越えての活動も考えられる。

鈴木委員

県として、広域な連携活動を想定しているのか。

事務局

初めは市町村単位で活動し、そこから広域化していくことを想定しているが、全県的な活動は難しいと考えている。

鈴木委員

山形市は非常に広く、市全体で連携するのは難しいと考えている。その場合は、情報が集まる拠点があればよいのではないかと思う。そうでなければ、各公民館など公的な施設を拠点として活動していくのが良いと思う。

高橋委員

家庭間の格差、地域連携の可能性、著しい少子化を課題と考えている。さらに、交通手段の不足の問題は、多くの問題の根底にあると考えている。

中学生や高校生の地域連携は重要であり、大人が子どもたちをサポートしながら地域とつながっていくことが必要である。

その上で、中高生が県内で活動するためには、交通手段がないことは大きな問題であると思う。

古原委員

ボランティアをして、地域づくりをしていく子どもを育てるということは、学校現場の教育の問題であるとも思う。小さいうちから地域と関わり、課題を解決する学習を通して、主体的な人間を育てていく基礎をつくるのが小学校の仕事なのだろうと考えている。

事務局

山形市外から山形市内の高校に通う子は、駅と高校の周りしか知らないことが多い。小学校、中学校、高校と、もっと地域に目を向けようというような仕掛けをしていく必要があると考えている。

古原委員

ボランティア活動のパンフレットはあるのか。

事務局

青年の家で、各市町村のボランティア活動をまとめているホームページを公開している。また、夏休みのボランティア体験先をまとめたチラシを各高校に配布している。

古原委員

小学校にも情報が欲しい。地域学習で活用できるかもしれない。継続という視点で、基礎的な子どもの気持ちを育てるところが大事だと思う。

「教育支援企業認定事業（仮）」について

鈴木委員

企業の中には、サイトに登録するまで積極的ではないところもあるだろうし、そもそも知らないという企業も出てくるかもしれない。だから、意図やねらいに応じて、コーディネーターのような人が企業をそのサイトにつなぐようにすると、効果的なデータベースになると思う。

高橋委員

世界に通用する商品を作っている企業が山形にもたくさんある。（例：オリエンタルカーペット、天童木工、米織など）「山形なんかなんにも無い」とよく言う子がいるが、山形の魅力を知る意味でもこの取組みは大切だと思う。

古原委員

宮城県のようなサイトがあると、学校側は非常にありがたい。先日、４年生の学年主任が木材の扱い方を教えてほしくて、20 社ぐらい電話したことがあった。担任の先生は、子供の体験活動を組むために、様々アプローチをしている。協力する企業の一覧があるのと同時に、学校側からも要望ができるという両サイドからアプローチできる仕組みがあると助かる。

また、教育課程を整理して、学校を地域や社会に開いていく必要があるとも感じている。これを機会に学校現場の教育課程を見直していくことが必要なのだろう。

鈴木委員

企業のメリットも出しながら活動が充実できるとよい。